昭和62年7月1日発行　（財）高知市文化振興事業団

文化高知 18

おらんくの風土

近藤　勝

高知は、四国の他の三県が伝統主義的な傾向、安住型の生活態度などで共通性をみせているのに比べて、一県だけ異なった特徴をもつ県である。

高知の大きな特徴は、まず、反権威主義的なことで、それは、国や役所などの、いわゆる「お上」や天皇についての考え方、年長の人に対する態度などに表れている。頑固一徹の「いごっそう」ぶりは、この反権威の姿勢のなかにうかがうことができよう。

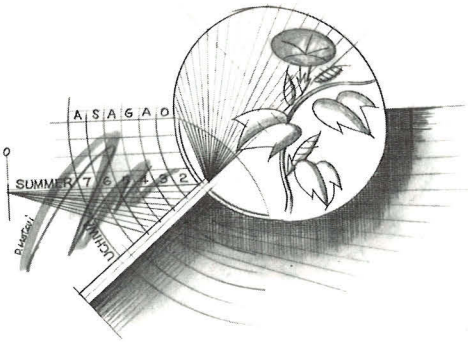
◇

『日本人の県民性――ＮＨＫ全国県民意識調査――』（昭和五十四年、日本放送出版協会）では、土佐人の性格（県民性）の要約の冒頭を、こう飾っている。

この文章を読みかえすそのたびごとに、滾滾（こんこん）として湧出する感懐に身を任せ、忘我の境をさまよい歩きしことのそも幾度ぞ――。

閑話休題――。さて、土佐人の性格をしてかくあらしめたもの、果たしてそれは何物であろうか。ここでは、率直かつ簡明に〝おらんくの風土〟と呼びたい。

ところで、いまさら風土論を展開する気持ちは毛頭ないが、なぜか〝風土〟なる言葉に〝不易流行〟（あえて芭蕉の考え方にあやかり）の四文字を当てはめてみたい衝動をどうすることもできない。なぜなら、こういう方法で理解せざるをえない宿命的性格が、風土には本質的に具備されているからである。



松井大洲

時間的に好都合なら、東京での会合に日帰りができ、かつては夢のまた夢と考えられていた瀬戸大橋が近く完成するという今日只今、我々はいやでも〝風土〟の不易なる面の確たる把握を怠ってはならない。しからば、それはいったい何であろうか。無限の将来にわたって不易なるもの、それは誰が何と言おうと〝歴史〟以外にはありえない。おらんくの風土に即して言えば、土佐人の歴史そのものである。この絶対唯一の〝風土〟（土佐人の歴史に基づく）あっての土佐人なのである。

それにつけても、この頃、どうしようもない悲観と慷慨の念を交錯させながら痛感することの一つは、風土のこういう哲学に基づく理解の欠如である。例えば、土佐を発祥の地とする自由民権運動（士族的だとの根づよい予断と偏見は、事実として存在するが）そのものは声を大にし、それこそ口角泡を飛ばして議論ないしは主張されているが、ひるがえってこの運動を生んだ真の風土とはとなると、とんとお忘れのようで、これが残念でならないのである。批難・叱責は覚悟の上で、失礼をもかえりみずあえて猛省を促す次第ではある。

おらんくの風土にこがれ味わえば
血潮は老いを忘れて騒ぐ

（高知学園短期大学学長
高知リハビリテーション学院学院長）

故郷を思う

安芸　元清

故郷を出てからもう三十五年になるが、本年末で満七十歳になるので、今までの人生の半分は高知で過したことになる。

家内も土佐人なら、息子二人も高知で生まれ、さらに息子の嫁も純粋の土佐人ときている。弟が高知の高校の教師をしているので、西町の生家は弟に譲り、御先祖様のお墓を護ってもらっている。本年も三月末、家内と次男夫婦に孫達（東京在）を連れて墓参を兼ね、我家のルーツを訪ねた。本年十一月には旧制高知高校の創立六十五周年行事がある。是非帰りたいと思っている。その他、年に二～三回は所用のため帰省する。帰ると、弟や友人達と一パイやり気炎を上げる。この様な環境の中にあるので、私にとって高知という処は、極めて身近い懐しい存在である。

新聞等に各県の色んな統計数字が出ていると、一番先に高知の欄に目がゆく。しかし、どうも最近は何かにつけ、余りよくない順位に位置していることが多く気掛りである。こんな状況下で、来年三月には本四架橋が完成するが、果して高知が本州のエネルギーを吸収出来るだろうか。逆の結果が出ないかと一寸心配である。

東北新幹線で東北地方が潤っているのは、観光資源と広い土地、豊富な水があるからである。高知には広い平地もなく、頼りになるのは観光資源を措いて外にはないだろう。しかし、高知の観光は相変らず〝桂浜、竜ケ洞、足摺岬〟の一本槍である。山紫水明の自然景観は勿論大切であるが、観光資源を創造することもまた肝要であろう。例えば、明治維新黎明期の歴史、自由民権運動の史実を収納した記念館が整備されていないのは、何故だろう。県民の声を結集して、是非立派なものを造ってほしい。これも大きな観光資源である。

目を高知市に転じてみよう。私達が子供の時代から馴れ親しんできた景観は、何と言ってもお城と鏡川と筆山であった。天守閣は戦災にも遭わず、高知のシンボルとしてその威容を誇っている。しかし足下を視て下さい。お堀が半分位埋められて、昔の面影がない（今はそれを知る人も少なくなったであろう）。これは戦後進駐軍が、蚊が発生するというので埋立て命令を出したためである。しかし、これを拒否したのは、当時の森四郎県土木課長であった。そのお陰で堀の一部は原型をとどめ得たものの、森課長は遂に左遷の憂目に会われたのである。その後岡山県土木部長に返り咲かれ、退官後は大本組で副社長になられたが、本年一月、八十四歳で逝去された。生前に復元されたお堀をお見せしたかった。今からでも森さんの霊に報いるためにも、何とかならぬかと考える昨今である。

鏡川は高知市のウォーター・フロントとして市民の憩いの場となっていたが、昭和五十一年の十七号台風により激甚な被害をうけ、復旧工事のため、人間と河川が遮断されたことは事実である。しかし親水計画と防災計画とは両立しうるものである。また川沿いの両岸を利用して、少なくとも五キロメートル以上の散策、ジョギングコースは出来ないだろうか。少し智恵をしぼってほしいものである。京都の女子駅伝の汚名を回復するためにも。

最後に筆山のことを考えてみる。我家の墓が小石木にあるので、よく通る道である。当初はさほど気に付かなかったが、昭和四十年代頃より、急速に西側が墓地として開発が始まり、高知市の表玄関は見るも無残な姿となったことは、何としても残念である。破壊された景観を復元することは、極めて難問が多いと思うが、専門家達による植樹計画をたて、昔の美しさを少しでも取戻すことは出来ないだろうか。一大市民運動の展開を切に祈るものである。

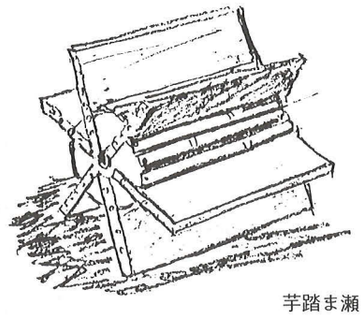
こう考えてくると、高知の将来は観光立県しかないと思われるのに、観光問題には極めて冷淡に思えてならない。

今後、日本の進路は大規模リゾート産業へと転換しようとしている。高知へ行ったら一ヶ月位は、楽しく遊びかつ学べる場所があるようにすることは夢だろうか。お金と時間はかかるかも知れないが、これをなしとげるには、立派な計画と、県民の打って一丸となった強い執念が必要である。しばらく「イゴッソウ」気分をお腹の中へおし込んでおいてもらいたいものである。

（株式会社日建設計　相談役）

聞き書の旅

河野　裕



芋踏ま瀬

「やあ、よう来たのう。まあ上がったや」

こうして書斎の机に向かうと、一期一会、再び会うことのない別離をくり返してきた数多くの老人たちの顔が次々に脳裏をよぎり、声をかけては消えていく。

私が県下の山里、海里に古老を訪ね、聞き書のための採話の旅を始めたのは昭和三十四年のことであったと、しかと記憶している。

なぜ、しかと記憶しているのか―。

昭和三十四年の四月一日にラジオ高知テレビ（現在のＲＫＣ高知放送）がテレビ放送を開始したからである。その前年の十一月、ＮＨＫ高知局は、すでにテレビ放送を開始していた。

当時、私はラジオ高知で『珍聞土佐物語』というラジオ番組を担当していた。老人が囲炉裏端で土地の伝説や民話などを孫に語って聞かせる土佐弁の三十分番組で、高い聴取率を取っていた。

その聴取率が、ガクンと落ちた。ラジオからテレビの時代へ――聴取者が視聴者に変化したからである。

そして、その四角いボックスは、白黒の映像と共に早口の東京言葉を視聴者に向かって機関銃のように浴びせかけた。私は思った。（これでは遠からず土佐言葉は滅びるのではないか。いまのうちに録音しておこう）

私の聞き書の旅は、こうして始まった。だから、その旅の始まりは昭和三十四年と、しかと記憶しているわけだ。

当時の山里は貧しかったが、そこには団欒が存在していた。

山の中腹の茶畑には娘、若い衆の姿があり、そこから見おろす谷川の瀬肩では里芋を洗う水車状の『芋踏ま瀬』が住民の数を誇示するように、幾つも幾つもクルクルと回っていた。

カヤ葺き屋根の農家に至る道端には、三椏が黄金色の花をつけ、納屋では牛が啼く。

囲炉裏ではクンゼが燃えて、訥訥と昔話を語る老人の顔を赤く染める。その老人の膝には可愛いい孫の姿―。

別れに際して、老人の口から出る言葉は、みな同じだった。

「この話は、いつ放送しますぞ」

土佐の山里に急激な変化の波が押し寄せたのは、昭和三十六年頃だったと記憶している。東京オリンピックをバネにした高度経済成長政策は、娘、若い衆や一家の大半を都会へ都会へと吸収してしまった。

茶畑から娘、若い衆の姿が消え、谷川の瀬肩からは『芋踏ま瀬』が数を減した。

三椏も牛も姿を消した。カヤ葺き屋根はトタン板でおおわれ、納屋には錆びこつれたトラクター。火のない囲炉裏の傍で語る老人の膝には、もはや孫の姿はなかった。

別れに際して、老人の口から出る言葉も変化した。

「高知の兄さんよ。泊まっていきなんせ」

目が泣いている。

「また、来ますから……」

「そうかよ……」

口とは裏腹に、互いの目は再会のない別離を確認し合っていた。

私の歩いて来た土佐のあちこちで、いま『むらおこし・まちづくり』が始まっている。一・五次産品で代表される『モノづくり』とまつりイベントで象徴される『団欒づくり』が、その二本の柱だが、前途は険しい。

国土庁がまとめた六十一年度の過疎白書によると、全国千百五十八の過疎市町村の全人口の約十七％、六人に一人が六十五歳以上の老人で占められ、全国平均より十七年も早いピッチで高齢化社会に突入しているという。独り暮らしの高齢者世帯は全国の二倍。地域の農家の後継ぎ予定者は二十七・三％――。

ここまで書いてきて、つくづく思う。

私の旅の始まりの部分で別れた老人たちはもうすでにこの世の人ではないが、その老人たちは―幸福であった―と。

（高知放送企画部長）

文化都市高知へ

細木　秀雄

■枡形川浄化運動

わたしの住んでいる町と電車通りとの中間に、もと水道町と呼ばれていた両側町があって、その中央を西から東へ流れる水路がある。

最近、通りすがりに、その水路の上流の方で、次のような立て札が出ているのに気付いた。

《町民の皆様へ
津和野とか萩市のように
この枡形川を鯉の泳いでいる清流としたい
困難をおしてでも市に実現してもらう為の小さな一つの実験を私達の手でやります
方法
低い堰で川筋を五つに区分し
地下水の清流を五つの池に溜めてそれぞれの池に鯉を放してみます
期間一年間で来年三月末までの実験です。
成功するか否かは町民の熱意にかかっています。
皆様協力して下さい

昭和六十二年五月二十日
上町老人会
枡形川を守る会》

枡形川は上町五丁目の思案橋～升形間を流れるおよそ１キロの水路で、毎週火・土曜日には水路の上に板を渡して市が立ち並ぶ。最近人々は忘れかけていた川や水辺へと目を向けはじめているのだが……。

その実験と、それを告げる立て札とが、どういう経緯で行われるようになったかは知らないが、住民の生活空間を浄化しようとする、こういう問題意識が、これからの市民文化を考えていく上できわめて重要であることを感じた。

実験はいま緒に就いたばかりなので、果たしてどういう成果が得られるものなのか、まだ分からない。見たところ川の流れは淀んでいて、廃棄物もかなり浮かんでおり、水も汚れたままの状態が続いている。

高知パルプ工場を廃止に追い込んでから久しいが、江ノ口川の汚れが依然として甚だしい現状を見ると、この枡形川の浄化運動も容易なことではないかもしれない。

しかしわたしの少年時代、江ノ口川はすでにひどく汚れていた。そのころからたぶん高知市は人口増加による生活排水などの害に悩まされるようになっていたようである。もともと人間の生活は自然環境の破壊から始まるといってもいい。その環境破壊の総量が、ある限度を越えたときに、ようやく〈環境破壊〉を意識するのである。人々は、なしくずしに環境破壊をしていて、やがてその被害に我慢ならなくなるとしがくるのである。

人間の生活そのものが文化だが、その生活のなかに反文化の根も胚胎している。

■伝統の創造的再生

ところで江ノ口川と違って、枡形川はわたしの少年時代、美しい清流であった。流れに沿って住む人たちがこの川で洗い物をしているのも見かけたし、洗い物をするための足場を作っている家々もあった。暑い時季には体を洗っている人もいた。しかし、洪水の時どこかの池からあふれ出たと思われる鯉が流れこんでいるのを見付けたことはあるが、枡形川はふだん鯉の泳いでいる川ではなかった。おそらく藩政時代からそうだったろうと思う。

枡形川を昔のような清流に戻そうとするのは、いわば都市の生活文化的な伝統への回帰だが、枡形川を鯉の泳ぐ川にしようというのは、伝統の変造であると同時に、それは伝統の創造的な再生と見ることができる。

本来、文化とは新しい価値の発見であり、創造的契機を持つものでなければならない。文化は現在といわず、未来のためにあるべきものであり、過去のためにあるべきものではない。

高知は幸いにして開明的な精神風土と、豊かな自然環境という伝統に恵まれていて、それが高知の文化を特色づけるのは当然だが、土地土地の文化というものを考えるとき、人々はつい後ろ向きになりがちな傾向があることを自戒しなければならない。

わたしたちは、自由民権記念館や、歴史民俗館や、美術館その他の博物館を、いずれ持つことになるだろうが、そこで何をするか、その施設がどういう方向性をもって機能してゆくかが肝心な問題なのである。

■盛んな高知の文化活動

文化は、学問や芸術にかかわる純粋文化から、日常的な生活文化にわたるまで、さまざまなものがある。

現代が文化の時代という意識はもはや定着している感があるが、それは大衆が文化を共有する時代になったことを含意している。学問や芸術はある程度大衆化されて、生活のなかに取り込まれ、特に芸術文化活動は大衆の日常生活を超えるもう一つの生活様式を、市民社会のなかに形成しつつあるように見える。

内発的なものに支えられた大衆の芸術文化活動は、それらの人々にとって新しい自己発見と、創造的な自己実現を果たすものであり、生きることの意味と価値とを高める。

長い歴史を持つ高知市文化祭や高知県芸術祭は、すべての分野にわたる地元の芸術文化活動を、ほとんど最大の規模でプログラムしている。こういう広範な芸術文化的エネルギーの顕現は、全国的にみても比類がない。

そういう実状を知らない人々は、なんとなく高知を文化的に後進の地のように思っているらしいが、実は意外に高知の大衆的な文化意識は高く、文化活動は盛んなのである。

それにしても芸術文化や生活文化など、つまり文化そのものが独り歩きできるわけではない。文化を支える基盤としての経済活動があって、そしてまた文化と経済の相関関係のなかから未来が開けてゆくのである。

高知市文化振興事業団が取り組んでいる幾多の事業のなかの一つである「まちづくりと都市美の創出事業」などは、明らかに文化と経済の相関関係を視野に置いている。都市問題などについての学術的研究に対する助成事業にしてもそうである。

すなわち都市美を含めた個性的な文化都市高知の実現が要望される次第だが、都市はかなり自分勝手に増殖してゆく性格のものだから、ぜひとも必要なのはシンボル・ゾーンの設定ということである。

また読む文化、見る文化、聞く文化の総合と発展と、その方向づけを図ることも、文化振興事業団が果たすべき課題である。

（高知市文化祭執行委員長）

高知を自主上映のメッカに

藤田　直義

私達自主上映グループ〈ムービークラッシュ〉は現在までに五〇回近い上映を行ない、約二百五十本の映画を上映してきた。しかし今また上映したい作品は増える一方である。

台湾やラテン・アメリカのように高知でなかなか見る機会のない国々の映画、「ゆきゆきて、神軍」「大日向村の46年」「一〇〇〇年刻みの日時計」など力作が揃ったドキュメンタリー、毎年新しい才能が発見される自主製作映画、D・シュミット、A・タネール、F・ムーラー、M・ロッドと先物買い的に企画してきたスイス映画は引き続き紹介したいし、実験映画やアンダーグラウンド映画は企画を先送りしている状態である。巨匠の古典的作品も資料的価値としてではなく、現在の視点で新鮮に映れば積極的に上映したい。要するに映画と名のつくもので高知で上映される機会のないものは、何でも上映してやろうというのが私達の姿勢である。

私達は主として高知市中央公民館視聴覚室を利用している。八ミリと十六ミリしか上映できないが、満席になった場合前の人の頭で画面が見づらいという点を除けば、使用料や上映設備等自主上映に最適のスペースといえる。三十五ミリ作品にも上映したい作品があるが、五百人収容のグリーンホールではリスクが大きすぎる。二百人程度が収容可能で、三十五ミリ映写機が常備されたホールができればすべてが解決するのだが。

私達は自主上映で自分の見たい映画を見る事のできる喜びと同時に、私達の上映作品を見て映画製作に乗りだしたり、新たな自主上映を行なったりする人が増える事を強く望んでいる。最近の自主上映の隆盛をみてもわかる通り、自主上映は簡単にできるものであり、時間と少々の出費さえ惜しまなければ誰にでも可能である。この調子で自主上映が増え続け、高知市が全国で最も自主上映の多い都市となる事が私達の夢である。

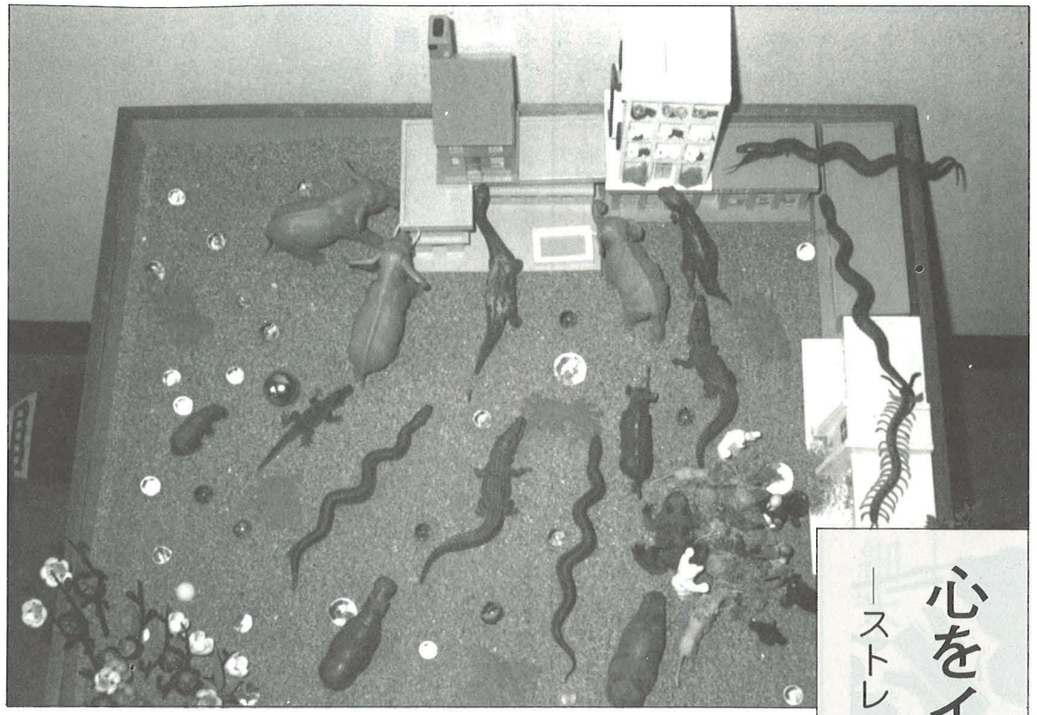
最後にこの場を借りて勝手なお願いだが、高知県に美術館ができた暁には、ビデオと映写設備を完備して、全国でもユニークな存在となってほしいと思う。

（ムービークラッシュ代表）

心をイメージ化する箱庭療法

―ストレス状況の子供たちとその作品―

高野祥子



〈登校拒否・高１女子〉登校拒否児特有の心理をわかってくれない教師に対するうらみを表現。激しい攻撃性を、校舎や教師を襲う猛獣や爆弾（ビー玉）に託し象徴的に体験することで乗り越えた。まさに「校内暴力」そのもので、迫力ある作品。

●身体化するストレス●

次第に機構が複雑化していく現代社会のなかで、子どもたちをとり巻くストレスの状況は、年を追うごとに悪化しているように思われます。

最近の子どもたちは学校生活においても深く他人とつき合おうとせず、「自分」対「集団」という関係の中で行動している傾向が見受けられます。「人並みでありたい」「他人に嫌われたくない」という意識が強く、対人接触に異常なほどエネルギーを費しています。クラスで人望があり人気者の子が、家庭に帰るとぐったり疲れているというケースなどはその一例でしょう。

また家庭環境も核家族化や子どもの数の少ない家庭が増加し、親の関心が子どもに集中し、子どもへの介入が強くなります。親の監視が強化されればされるほど、子どもが自由に主体的に行動できる時間は少なくなってきます。

その一方で、友人がいない、遊ばない、手伝いをしないという子どもの状態に関心を示さず、成績さえよければあとは何も言わない親も増えています。

医学的にみても何ら異常は見あたらないのに、ある日突然、頭痛、腹痛、肩こり、背中の痛みを訴える子どもがいます。いわゆる「心身症」といわれるもので、これらの子どもたちに「何かしんどいこと、つらいことはない？」と質問しても「別に……」という答えしか返ってきません。本人の自覚のないまま心の奥底にストレスがたまっているのです。

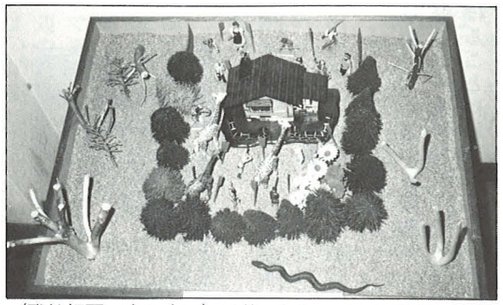
またストレスが心に顕われると、登校拒否や指しゃぶりなどの症状となります。

●心を癒やす箱庭療法●

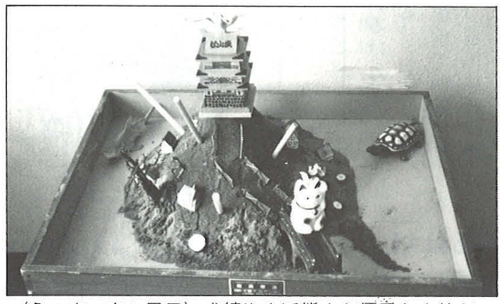
そんな子どもたちの治療に効果を発揮しているのが、心理療法の一種の「箱庭療法」です。箱庭療法は「ひとつの箱の中で演じられる限りないドラマ」であり、深い心の世界がイメージとして象徴表現され、目には見えない心を視覚化してみせてくれます。言語をなかだちとするカウンセリング、夢分析、催眠法などに対して、箱庭療法は絵や遊びや音楽などと同様に言語以外の自己表現を用いる療法です。

使用する用具は、ミニチュアの人形や動物、家、草木、自動車などの玩具と砂の入った箱（内法五十七センチ×七十二センチ×七センチ）だけです。玩具を組み合わせるだけの技法のため、絵画を描くときのように巧拙にとらわれる心配もなく比較的抵抗なく作り始め、一度作ると「おもしろい」と感じ継続して作るケースがほとんどです。また砂に触れることが子ども心を呼びおこし、意識の統制力を弱めて内面的なものに向かわせる働きがあります。

ストレスの強い子は猛獣の咬み合いや戦争、交通事故、あるいは蛇や人形を砂の中に埋め込む場面などを作ります。また登校拒否の子どもは校舎をひっくり返して置いたり、家具ばかりで人の居ない部屋を作ったりします。箱庭を作ることでストレスを解消していき、やがて穏やかな街や村の情景が作られ楽しげな人々が出て来るようになると子どもの心は癒やされているのです。



〈登校拒否・高１女子〉動物、垣根、木と三重に囲まれて身動きがとれない自分を表わす。作り終えた後、彼女は自分の殻に閉じこもっていたことに気付いた。



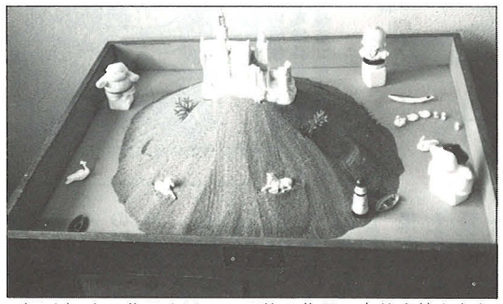
〈うつ病・高１男子〉成績や生活態度が優秀な生徒が、突然背中の痛みを訴えた。「人といると疲れる、芯から楽しめない」と言って作った作品。不安定な城が象徴的。

クライエント（来談者）に対しては、「何か作ってみませんか」と誘います。大切なことは、何を作っても許容される自由が保障されていることで、クライエントとそれを見守る人（治療者）の一対一の関係が深まっていくのです。クライエントはオープンに自分を出すことで、自己治癒力が促され、内面がおのずと統合されます。

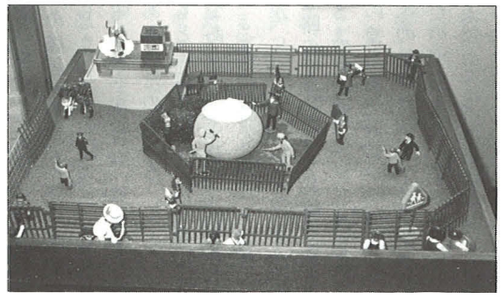
回を重ねるにつれてクライエントは箱庭を作りながら、自らの意識の介入と解釈を入れこんで自己洞察を深めます。治療者も一緒に作品を鑑賞し、その作品の流れをみていると、治療の進みぐあいやクライエントへの理解を深めることができるのです。

このように箱庭療法は自己治癒力を引き出すことで、クライエント自らが治るのを手助けするものです。日本に紹介されて二十年ほどになりますが、これからますます注目される治癒法のひとつではないでしょうか。

（鏡野中学校教諭）



〈同上〉上の作品より１ヵ月後の作品。身体症状もとれ、柔軟な思考ができるようになった。この理想マンダラ（精神の調和のイメージ化）を作ってから復学した。



〈登校拒否・高１女子〉人々に監視され、こだわりの多い内面のイメージ化。まん中にあるのは卵で、生まれかわろうとしている自分を象徴的に表わしている。

◆八月六日（木）、七日（金）の両日、第三回高知箱庭療法研究会が高知グリーン会館で開催されます。初日は山中康裕京都大学教授の講演、二日目はケース研究を行なう予定です。一般の方も参加自由です。

連載■〈街づくり〉の現在 1

会得できるか風景術

石井空間研究所
石井　鬼十

風景術

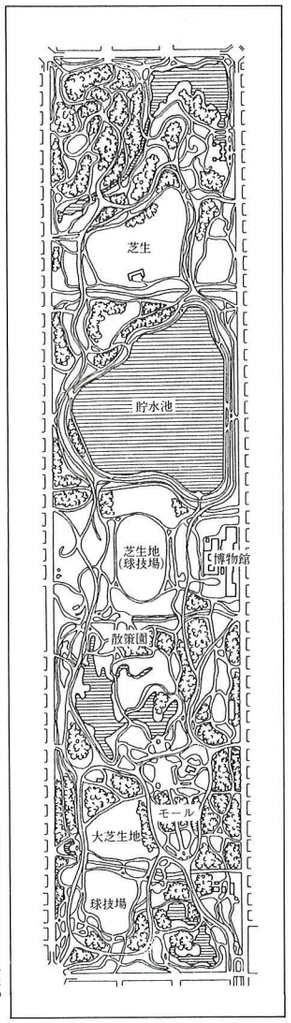
〝歴史はくりかえされる〟と良く言われるけれど、「風景論」や「都市の美観論争」も又然りである。しかし、肝腎の「風景術」については、一般大衆の面前で話題にのぼることは稀れなことであろう。さらに、その風景術をつかさどる専門家として、どんなジャンルの人々をイメージするのであろうか？

考えてみると、建築・土木・造園・都市計画などの色々なジャンルと「風景術」は非常に密接な関係がありながら、いまだ、都市美を意識してなされているような気配も十分には感じられないし、たとえ意識していても、自分の仕事の上、又社会の内へ、どのように反映していけばいいのか戸惑っているのが実態ではなかろうか。しからば、この「風景術」とやら、本当に存在するのであろうか？　もしあるとするならば、どんな「術」であろうか？、甲賀の忍者じゃないけれど、「風景術」の極意を会得したいものである。会得するには、それ相当の苦行が待っていることであろう。

そこで、私も、その「風景術」とやらの極意を伝授つかまつりたいと思し、さまざまな文献を紐解きましたところ、その一端として、アメリカの〝セントラル・パーク〟の誕生に起因するいきさつの一件に深く関わりがあることをつきとめた次第である。即ち、「風景術」のそもそもの起りは、イギリスのワットの蒸気機関に端を発したルネッサンス（産業革命）である。このエネルギー革命によりイギリスの森林の大半が伐採され、街はスモッグで汚れた。同じような現象はアメリカでも起ったのである。人間の繁栄とひきかえに、環境は貧困を増し、街は無秩序と公害にあふれたのである。

このような背景のもとに産まれたのが「セントラル・パーク」誕生の一件であった。これは、アメリカにおける一大英断であった。この競技設計がきっかけになり、偉大なる〝風景師〟が、アメリカにはじめて誕生したのである。現在の高速道路の立体交叉も又緑の多い街の〝田園都市〟の産みの親もこの風景師、F・L・オルムステッドそのものであったのである。彼はすでに人間に対する優しい心と他の生物への思いやりと、将来の人間の街づくりを先取りしていたのである。ルネッサンスという言葉の響きのうちに、人間のどうしようもない〝さが〟みたいなものが潜んでおり、結局は歴史をくり返さざるをえないのではなかろうか？　人間が繁栄を求めつづけていく、その一方で、自分達の環境を追い求めつづけていくという、一種パラドックス的な〝風景術〟が要求されているのも又確かなことである。

ほんのこの二十数年前頃に、すい星のごとくあらわれたエコロジー学（生態学）があたかも伝家の宝刀のごとく思われていた。しかし都市という人間が構築した一種違った人工の場で、人間は自然の生態学を完全に崩壊させ、新たに人間に合った環境をつくっていこうとする極めて特異な動物と思わざるをえないであろう。従って都市では、自然の生態学的発想ではたちうちできないところにきているように思える。人間の心理、生態をベースにしたコントロール学としての〝人間生態学〟なるものこそ、都市の風景術となりえるのではなかろうか！　風景に許容力がある間は、財政の限りを尽して、美しい人工的な環境を構築することができても、現在の社会状勢ではいかに……？　やはり中国の最先端地、上海市の如く、日本の横浜・神戸のモールを代表とする〝街づくりの美学〟を追い求めていかなければならないのであろうか、一足飛びに、モール美学を追い越す「風景術」の出現を期待できないものであろうか？



▶セントラル・パーク　大山陽生・養茂寿太郎・松本倫共著『緑空間の計画技法』（彰国社刊）より

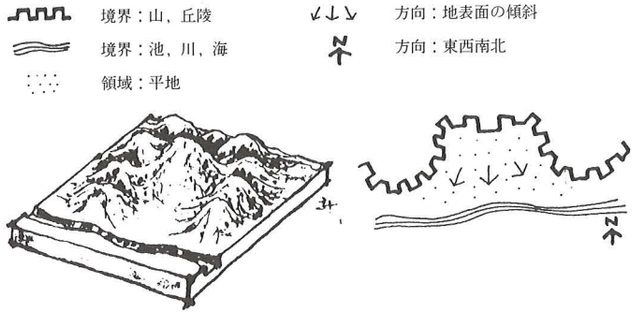
風水術

古来、日本の平安京・平城京の街づくりも、もとをただせば中国に源を発しているらしいということが解った。それも朝鮮を経由して日本に伝わってきたらしい。この東洋・中国で起った「風水術」は、中国の古代から伝わってきた街づくりの立地論であり、地理学・地形学・環境学の源流ともいわれている。

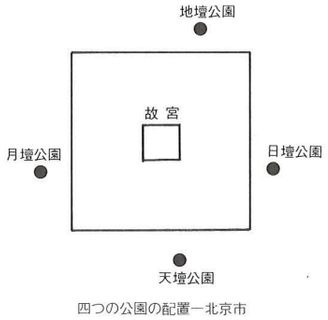
このことは、首都・北京の街づくりにも色濃く反映されているのである。仏教的宇宙観と、この「風水術」による北京の街、市街地のほぼ中央に天安門を先頭とする故宮、かつての紫禁城の波打つ赤いいらかが正方形に近い姿で並び、その南には丸い平面を持った天壇が、北には正方形の平面を持つ地壇が、そして東には円形をしのばせる日壇公園が、西には半円形をしのばせる月壇公園が、それぞれ正しく置かれているのである。

このような「風水術」も文化大革命以後は、ほうむりさられているが、いまだ古老の頭の内には生きつづけているらしい。そして隣りの朝鮮では、今なお、風水師とか風水先生とかいう職能が存在して根づよい思惟構造となっている。

ところで、この「風水術」の内の一つに「蔵風得水型風景」がある。この風景を、『日本の景観』（春秋社）の著者である樋口忠彦氏は、図（下図）とともに次のように言っている。「――日本人にとって最も好ましい棲息地であったのが山の辺の〝野〟の景観であった。この山の辺の野において、日本人に重要な意味をもってきた場所は、背後に山を負い、左右は丘陵に限られ、前方に平地、流水を望む、いわば母親の懐のような場所であった。私が〝蔵風得水〟と呼ぶ風景である――」。蔵風得水といえば、まさしく高知市もそうである。更に樋口氏は、「棲息に適した景観を即ち〝生きられる景観〟とは、その場所が棲息適地であることを、一つの全体のまとまりとして瞬時に見てとることであり、風景の美的な判断というものは、そもそもこういうものであろう。〝生きられる景観〟とは、場所あるいは土地に隠された固有の特性を発見し、それを創造的に人間生活の内に組み入れることにより成りえる」とも言明している。



蔵風得水型景観の構造と構成要素



四つの公園の配置―北京市

土佐の風景術

以上のように一つは西洋に端を発した「風景術」、そしてもう一つは東洋の「風水術」も、ともに我々が住む日本の高知市にも大なり小なり影響を与えているのである。高知市の景観は「風水術」によると「蔵風得水」型の景観であり、そして街の文化や建築様式はアメリカの文化を色濃く表現している。このような状況のなかで、我々が住む土佐の風景術をこれから模索していかなければならないだろう。

アメリカの「風景術」、そしてドイツの生態学をベースにした「風景術」、更に世界最古の作庭の書を持つ日本の「風景術」。たとえば、日本庭園の素晴らしい〝空間の演出力〟が、何故、今日の都市計画や公園などの公共空間に生かされなかったのであろうか――このことは日本庭園を、そのまま造るということではなく、庭園の空間演出の技術（借景とか、広く見せる技術とか、竹垣によるさわりの技術など）を街づくりに生かしていくということである。

このように、それぞれの「風景術」の良さを取り込むことによって土佐の風土にあった「術」を構築することができるのではないかと私は思っている。その意味で、都市美創出の「術」は、今スタート・ラインに立ったばかりといっていいのではなかろうか。

世界の中の日本〈中〉

日米教育事情

森木　房恵

計算能力は優れているが…

中曽根首相が「アメリカの教育レベルは、日本より低い」云々と発言して、大問題になったことがあった。アメリカ中に日本製品があふれ、ピリピリした貿易摩擦をおこしている状況の中で、公の立場にいる人がこういうことをいうべきではない。第一、失礼である。しかし、実はアメリカに少しでも暮したことのある人なら誰しも同様のことを思っているのではないか。

昨年末、ちょうどニューヨークに行った折に、テレビで「学校のイエローパワー」という特別番組を見た。アメリカ人自身が、黄色人種の二世の成績が平均からズバ抜けていることを認めたドキュメントであった。が、果して本当に日本の教育はアメリカよりレベルが高いのだろうか？

アメリカで買物をすると、店員が暗算が出来ないことに驚く。例えば七ドル四十五セントの物を買って十ドルで払うと、まず、ニッケル（五セント硬貨）をくれて「五十」といい、次にクウォーター（二十五セント硬貨）を二個くれて「八ドル」といい、更に一ドル紙幣を「九ドル」「十ドル」と一枚ずつ足して、やっと「サンキュー」になる。日本人なら小学生でもこのくらいはすぐに暗算して、二ドル五十五セントのおつりを待っているから、ついイライラしてしまう。日本の中学三年生の計算力は世界一といわれるが、確かに、普通の計算において、アメリカ人の頭が悪いからではなくて、そういう練習をやらないから――つまり学校教育が計算力を重視して行われていないからではないか？

小学校からスピーチの訓練

私の仲間は、殆んどが国際結婚なので、今彼らの子育て周辺と私の場合をついつい比較して見ることになって面白い。うちの子は小学四年生で宿題の大半は計算ドリルと漢字である。一方ハワイの学校に行っている洋ちゃんの宿題は、大低、リンカーンについての本を読んでくることだったり、カメハメハ一世について調べてくることだったりする。片や、計算を練習し漢字を覚える子、片や本を読み調べてクラスで発表する子。この両者の宿題の延長線上に、それぞれの国の教育への取り組み方の違いがはっきり見えないだろうか。テストの点数で、今すぐ効果の見えるのは確かに日本式教育であろうけれど、これは即、教育レベルの差といえるのか、よしんば、いえたとしても、果してこれでよいのか？

アメリカでは、小学校から「スピーチの時間」という授業がある。一人ずつ前に立って短いスピーチをしたり、グループに分かれてディベイティング（討論）したりする。この中で、自分の考え方で相手を説得するには、どう話せばよいかを自然に学び、相手方の主張を上手に聞いて、認める部分や批判する部分をどう整理していくかといったことを身につけていく。成長期にこういう訓練をくり返しやるから、人前で話すのがうまくなり、パーティ好きになり、議論することをエンジョイしたりも出来る国民性が育つのだと思う。そして明るくバイタリティーに富み、フレンドリーなアメリカンビジネスマンのステレオタイプが出来てくる。

一方、私達日本人は、つい議論は避けてその場を丸く収めようとし「検討します」式の逃げ方をしてしまう。話し方が下手なのは、英語のハンディのさらに奥に、この、人と話すことに不馴れなことが大きく災いしているのではないだろうか。

十歳のベビーシッター

ニューヨークのダウンタウンに、以前のルームメイトがいる。彼女自身もご主人も画家で、流行の大きなロフト（倉庫を改造した住まい）に住んでいる。子育ての合い間に、画を描く時間をとるためにベビーシッター（子守り）を雇う。れっきとした保母の資格を持った人もいれば、子供達が日本語を覚える機会を作るために、わざと日本人の学生を呼んだりもする。ある週末訪ねて行ったら、今日はアリスが来る日だと子供達が喜んでいる。四歳のジョナサンと二歳のあやかちゃんは、大抵のベビーシッターとうまく留守番するのに馴れていて感心するが、中でも一番好きなベビーシッターとは、どんな人だろうと思っていると、インターホンに「ハーイ！」の声が入った。ヒサコさんがエレベーターで迎えに下りて行く。ニューヨークの治安が悪いのは有名で、このロフトも、ビルのドアが二重になっているほか、彼女の家に入るまでに四つの鍵が要る。

上って来たアリスを見て驚いた。バイオリンを抱えた小さな少女だった。ヒサコさんが私を紹介する。「ハウドゥユドー、お目にかかれて嬉しいです」などとキチンと目を上げて挨拶をする。子供らしくて明るくて、ちっとも悪びれたり恥ずかしがったりしていない。ジョナサン達に「ハーイ！　元気？」と話しかけている。早速二人をソファに坐らせて「今日はどの本を読んでほしい？」などといっている。これは立派な先生だ。

アリスは十歳。両親の離婚で今はユダヤ系のお母さんと二人暮らし。ベビーシッターの時は、お母さんが車で送って来て、二時間で十ドルもらい、その後ヒサコさんがバイオリン教室まで送って行く。この日は私も一緒に送って行った。将来は弁護士になりたいという。今はお母さんを助けたいからアルバイトをしているけれど、ベビーシッターを楽しんでやっているなどという。前向きである。話に夢中で、すぐ七ブロック歩いてしまった。「送ってくれてありがとう」とキチンと礼をいって立派な教室に入って行った。質素なセーターの背中が輝いて見えた。

両方の長所を生かす

一個の人間として、大人ともしっかり話が出来行動出来るこういう類の子に、アメリカでは時たま出会う。進学も就職も、インタビュー（面接）が重要視される社会だから、こういう芽が伸びるのではないだろうか。同じ可能性を持った子が、ペーパーテストで採点する日本の教育の中で、果して同じ育ち方をするだろうか？

今や、日米の間は非常に近くなったけれど、それぞれの教育の目ざしているものは随分違うように見える。自分のものさしだけで他人は測れない。何とか両方の長所をとって育てられないものだろうか。

（ユナイテッド航空スチュワーデス）

高知市近代年表（六）

明治三十一年（一八九八）
3・15　第五回臨時総選挙（自由党九十八人、進歩党九十一人、国民協会二十六人）
4・11　土佐電灯株式会社営業開始（資本金十万円、供給七百灯）
5月　帯屋町に簡易商業学校開設
6・22　自由党と進歩党が合同して憲政党成立
6・30　憲政党内閣成立（総理大臣大隈重信、内務大臣板垣退助）
8月　西弘小路に市立伝染病院設立
8・10　第六回臨時総選挙（憲政党二百六十人、国民協会二十人）
10・31　憲政党内閣分裂
11・15　土佐農工銀行設立
12・27　物産陳列場を帯屋町勧工場に設置
◇この年、新月橋架設
明治三十二年（一八九九）
3・31　田岡嶺雲『嶺雲揺史』刊
4月　高知市立商業学校、私立実業女学校開校
7・8　暴風雨により市街浸水
7月　高知水上警察署設置
◇この年、土佐共同汽船、帝国商船が合併して土佐商船株式会社設立
◇この年、本町東詰の堀川の埋め立てを実施
明治三十三年（一九〇〇）
3月　高知酒造組合組織
3月　山田橋～種崎町を結ぶ八幡通を開設
9・13　憲政党解散
9・15　立憲政友会発会式（総裁伊藤博文、役員中の土佐人は片岡健吉、林有造）

11・27　立憲政友会高知支部発会式
12・6　黒岩周六、「五目並べ」を「連珠」と呼称することを『万朝報』で初めて提唱
12月　中島町に高知座新築落成
明治三十四年（一九〇一）
5・20　幸徳秋水、片山潜、安部磯雄ら社会民主党を組織し、即日禁止となる
5・25　水産試験場を県庁内に設置（翌年須崎市へ移転）
5月　高知県蚕糸同業組合設立
8・29　中江兆民『一年有半』刊
9月　円満橋（北奉公人町～小高坂）架設
11月　米国婦人ダウド、鷹匠町に高知女学会を開設
12・13　中江兆民逝去（五五）
明治三十五年（一九〇二）
5・28　幸徳秋水『兆民先生』刊
8・10　第七回総選挙（政友党百九十人、憲政本党九十五人、帝国党十七人）
10・9　ユーゴー作・黒岩涙香訳『噫無情』、万朝報に連載開始
◇この年、勧工場内に麦稈製造講習所を設置
明治三十六年（一九〇三）
2・23　天神橋撤去決議
2月　高知慈善婦人会（のち土佐婦人会）設立
3・1　第八回総選挙（政友党百七十五人、憲政本党八十五人、帝国党十七人）
6月　土佐電気鉄道株式会社創立
7・5　幸徳秋水『社会主義神随』刊
8・10　海南倶楽部結成
10・31　片岡健吉逝去（六一）
11・15　幸徳秋水、堺利彦ら平民社を結成、週刊『平民新聞』創刊

蘇れ！青年団

坂本　昭夫

香北町青年団が今…

「青年団にどうして入ろうと思ったんですか？」と聞かれることがあります。「えーと」なんて考えてみるんですけども、たいしたことないんです。簡単にいうと、先輩団員や友達のくち車にのせられていつの間にか青年団員になってしまったんです。でもそんなふうに入団した自分が三年目を迎えてもこりずに続けている。これはやはり青年団というものが自分に対して必要だからに違いないからだと思うのです。

それでは私達の城を紹介します。「香北町青年団」は、香北町の中心地美良布（びらふ）にあります。人口六千人、町のまん中を物部川が貫流し風光明びなところです。今年二十歳を迎える香北町青年団は、昭和三十六年に三つの村と一つの町が合併して香北町となり、昭和四十七年に今までそれぞれの町村で独自に活動してきた青年団がひとつになってできました。

最初は、農業技術の向上や助け合いという今でいう4Hクラブ（農業後継者クラブ）と同じような活動でしたが、そのうち農業従事者だけじゃなくもっと広い仲間と幅広い学習や活動をしていきたいと、地域と深くつながった青年団を築いてきたのでした。今までの青年団活動とは、例えば、道路の清掃活動、演劇、祭りの企画運営、広報活動、啓蒙運動など地域と深く結び付いた奉仕活動と、若者の交流の場・主張し合える聖域の確保としての活動であったと言えます。それは日本全国どこの青年団も同じです。そして、その流れの多くは今の私達の青年団活動にも反映しています。

しかし青年団は今、県下的なレベルで衰退の影を落としています。それらの原因は時代の流れの中で青年の集まる場の多様化、職場の多様化、過疎の問題などの複雑なからみによって、力の結集ができ難い状態にあるのだと思います。

生き残った私達の青年団

それは私達「香北町青年団」も同じです。数年前から村おこし事業なるものを計画し、町を売り出す大きなイベントや祭りなどを成功させ、香北町、そして香北町青年団の名を他市町村の多くの人々に知って頂くようになりました。よく「香北町は凄いですね、青年団は頑張っていますね！」と声をかけられます。

しかし、それはあくまで青年団だけで成し遂げたものではなく、町内外のリーダーの方々を始めとする多くの方々の援助によってできたものであるのです。結局、団が有名になるのと裏腹に、活動団員の減少、意志統一の低下というような青年団内部での問題は大きくなるばかりでした。一時は、団の解散まで考えたほどでした。

そうした中で、もう一度青年団のあり方を考えてみようということになり、OBの人の話を聞いたり、研修や学習会を開きました。そこでは、自分たちが個人個人で抱えている問題点から始まって、村おこしが青年団の目的なのか等々までいろんな話し合いをしました。おかげで、現在は団員数も増え、活気が戻り始めています。

TRY and TRY

今度のことをキッカケに青年団というものを振り返って私はこう思っています。「青年団は青年団員のためにある！」と。青年期というものは、子供から大人社会への登龍門であり、それぞれに悩みや問題を抱えながら、絶えず闘いの連続にある時代です。そうした個人が青年という名のもとに集まった場が青年団なのです。そういう意味で青年団活動は、自分たちが素晴らしい大人として成長し、向上していくための一つの手段であって、決して活動が目的であってはならないように思うのです。

時代の流れの中で、私たち地域に残った青年に与えられた仕事や、未解決の問題は計り知れないほどたくさん山積しています。それに正面きってぶつかっていける人間形成の場としての青年団。これこそがいま最も青年団に求められる課題だと思うのです。「TRY and TRY」はマザーテレサの言葉です。人と出会い刺激を受けながら成長していく、チャレンジしていく。そういう姿が、ひいては地域を活性化していく原動力になるのではないかと思っています。

（香北町青年団副団長）

私の風景

玉川　潔

鏡川大橋

六月十五日（月）雨
○7時半、起床。手を洗い、口をすすぐ。メシを食い、クソをして石鹸で手を洗い、歯を磨き顔を洗う。○8時半、子供を幼稚園へ送り現像所へと向う。…なんだこりゃ？　これじゃあオイラは金魚じゃねエか。ま、金魚のフンじゃないだけましかいな……。○長い雨が終るとロマンティックな夏が始まる。とりあえず、それまではガ・ン・バ・ロ・ウ。

シャイな高知県人様

二宮　邦江

私の椅子から一・五メートル先に、画廊の白い扉がある。毎日そこから、カシニョールの絵から出てきたようなお嬢さんや杖をついた老紳士など、様々なお客様が来廊する。

「リトグラフって何ですか」

「版画の一種で石版画のことです……」

と、版画商の私は説明する。

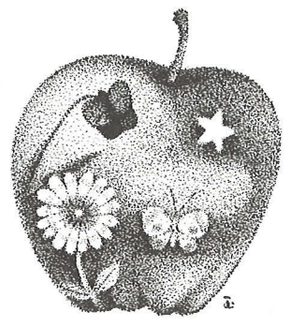
面白いことに、扉を開けて入ってくる人を見た瞬間に随分たくさんのことがわかる。県内客か観光客か、絵に精通した人か否か、単に版画を見にいらしたのか、それとも購入のためにいらしたのか等々。そこで一様に感じることは、殆どの方がとても引っ込み思案であるということである。

一般に高知県人は、〝いごっそう〟といって自分の主張を曲げない偏屈なところがある。自分の殻に閉じこもり、未知の世界、専門外のことまで入り込んで追求しようとしない。シャイなのだ。しかし、こと芸術に関してはその殻を打ち破り、もっと貪欲に、好奇心を持ってほしい。無理をして実際に絵を見に行かずとも、最近は週刊誌でも新聞でも、あらゆる場所で美術作品が紹介されている。そこからでもいい、美術にまず興味を持ち、そして、本物の美を求めてほしい。本当に美しいものを見たい、聞きたい、触れたいと願う心を育ててほしい。

やがて造られるであろう高知の美術館にも、一人一人の小さな知識や探求心が集約され、反映される。私自身も、美術を広める媒体の一つとして、更に知識を増やすよう努力したい。

まだ見知らぬあなたが、この白い扉を押して、小さな疑問を投げかけてくれるのはいつのことだろう。そして語ろう。パリのモンマルトルのカフェに座ったつもりで、清楚な愛すべき版画家長谷川潔を、エネルギッシュなピカソを、そしてあなたを。

（ギャラリー邦）



（カット・玉井哲夫）

高知・知っちゅう会

叡智と実践

片田　興

「地方の時代」という言葉を最近よく耳にします。その一方で、私達が生活している地域のことについてどれだけ知っているのでしょうか。知っているようで意外に知らないことが多いのに驚かされます。もっと地域のことを知ってみたい。そういった思いが膨らんで昭和六十一年二月、高知短期大学に「高知・知っちゅう会」が結成されました。会の名称も土佐弁の「高知を知っちゅうかえ」という問いかけと、集まりであることの「会」の二つをかけ合わせて誕生したものです。

現在会員は教員を含めて二十六人、年齢や職業も多種多彩ですが「現実を知り、人に学ぶ」を会の目的におき、高知県内の興味ある地域へ調査に出かけています。昨年度の活動として、佐川町、鏡村、梼原町、十和村、大正町などの調査があり、その成果は「LOOK・土佐」(現在四号まで発行)としてまとめています。また今年度の活動計画としては再度、鏡村や梼原町の調査を予定しています。

このように実際に地域を訪ね、現地の人々の生きた声を聞くことで、机の上での学習では得られないことを学ぶことができます。さらに調査を通じて生まれる人と人との触れ合いそして思いがけない発見、こういったことを各地で積み重ねていくことができれば、調査の成果もより大きなものとなるわけです。私達は昼は仕事、夜は授業と忙しい毎日を送っていますが、これからも意欲的な活動を続けていきたいと思っています。

(高知・知っちゅう会事務局長)
連絡先二二一―〇一六一(金高堂・大久保)

高知おはなしの会

子どもたちに「お話を」

中内　美江

新人類などということばがあります。テレビだ、ビデオだ、パソコンだと進歩していく社会の中で、次の世代が育っています。かつてなかったこの急激な変化に、事もなげに対応していく彼らに感心ばかりもしていられません。何だかおかしい世の中になってしまいそうな気配も感じられます。人間が人間らしい機能や心を失わないように、子どもたちに何か働きかけておきたい。私たちは、そんな思いを込めて、子どもたちに「お話」を語っている者の集まりです。最近、子どもたちに、本を読んでやったり、「お話」を語って聞かせることが見直されています。十分に「お話」を聞き、十分に本を読んでもらった子どもは、ものごとに強い関心を示し、情緒や想像力がゆたかになる。しかも、知的な色彩感のある、感覚の鋭いことばを身につけると言われ、聞く力はやがて自ら読む力につながります。

子どもたちによい「お話」を語るために、私たちは、毎月第二火曜日に県立図書館の「ストーリーテリング勉強会」で学びながら、依頼があれば図書館や学校、幼稚園、保育園などへ語りに出かけています。昨年は、東京子ども図書館から根岸貴子先生をお迎えして、研修会も行ないました。「高知おはなしの会」の名称を持ってから五年、会員は三十人足らずと小人数ながら「お話」の好きな子どもたちに、少しでも多く語って聞かせたいとの意欲に燃えています。

(高知おはなしの会会員)
連絡先　七二―六三〇七
(県立図書館こども室)

高知大学留学生を支援する会

留学生と草の根の交流を

市川みどり

高知大学への外国人留学生の数は現在三〇人を越え、私達の会(会員百四十人、賛助会員四十人)は発足六年目を歩んでいます。以前にオーストラリアからの留学生を一年間、我が家に滞在させたことがきっかけで、大学や留学生と県民の間に橋渡しをする団体の必要性を痛感したことが、会の発足にふみ切った動機です。この会は誰でも入会できるボランティア団体で、次の二つの目標を掲げています。

①留学生が高知でできるだけ快適に生活できるよう援助する。②留学生と県民が交流できる場を設ける。

以上の目標達成のために、自転車、扇風機、こたつ、ストーブ等の無料貸与、日本語教室、ホームステイ、日本文化の紹介、料理講習会、歓迎パーティ、ピクニック、会誌「あけぼの」(年一回)の発行と活動は多岐に渡っています。昨秋は発足五周年を記念して、留学生から「各国の女性事情を聴く会」を開催し、好評を得ました。

近年、日本語熱がパッと世界に拡がった観があります。二十一世紀には日本語を話す外国人が普通になるのではないでしょうか。様々の伝統、文化を背負った外国人と、お互いの立場を尊重しながら、つきあうのはむつかしいことです。けれど私たちは謙虚に心を開いて、肌の色の違いに関係なく同じ人間として、高知の豊かな人情を理解していただきたい。草の根の交流が国際親善の環に大きくつながって行くことを信じて、あせらず、地道に活動を続けたいと思っています。

(高知大学留学生を支援する会代表)
連絡先　三二―〇九六九(市川)

高知漫画グループ・くじらの会

明日のプロをめざして

松本　文雅

昭和五十四年五月に『くじらの鼻歌』というマンガ雑誌が創刊されました。この雑誌の執筆者は高知県出身のマンガ家ばかりで占められており、しかも高知県内だけでしか発売されないという少し変った雑誌でした。

私たちは「明日のプロ」を目指してこの雑誌に投稿していたわけですが、いつか、お互いの親睦と技術の向上を図るために会を作ろうということになり、昭和五十七年二月にマンガ家青柳裕介さんを中心に十二人が集まり現在の「くじらの会」を結成しました。

会の活動としては、県下各地で児童とその父兄を対象にマンガ道場を開き、マンガでゲームをしたり、原画の展示や似顔絵コーナーなどを設け、一日楽しく過ごしてもらっています。

また、今年一月から毎月最終土曜日の高知新聞朝刊に「高新漫画道場」という欄が出来ましたので、くじらの会から三人ずつ交替でマンガを掲載しています。

もちろん、会本来の目的はプロの漫画家を目指すということなので会員各自がそれぞれのマンガ雑誌に投稿しています。われわれの会から、現在三人のプロのマンガ家(架空まさる、具志堅竜矢、くさか里樹)が誕生しています。

マンガを描くこと自体は、孤独な作業です。楽しく描いて一日も早くプロになるためにも、興味のある方は一度くじらの会においでてみませんか、年齢制限は設けていません。

(高知漫画グループ・くじらの会会長)
事務局〇八八〇―二―〇二二〇(橋村)

さく文

追手前小学校1年
しまだ　りえこ

夕がたまで、のこって
さくぶんを、五まいもかきました。
できたとき、
先生が、
「ばんざい」
と、手をあたまの上に、上げました。
もう一かい
わたしもいっしょに
ばんざいをして、
だきあいました。
かえりにチョコをくれました。
それから、
もんをでたところまで
見おくってくれました。
わたしは、
さく文が大すきです。

風伯

文化と商魂

学生時代、神田の古書店一誠堂で北原白秋全集の中の詩集の分四冊だけを売ってくれないかと交渉したことがある。昭和初期にアルス社から出版された革装幀の優美な全集だった。全集の中で詩集だけを売れという話自体が無茶なことだが、あまりの熱心さに店員は奥に入って店主に伺いを立てることまではしてくれた。そしてその挙句、主人から丁重に断わられたのは言うまでもない。

以来三十年近く、昭和五十九年に岩波書店から白秋全集刊行の発表があった。しかし、遂に念願が叶うとの喜びも空しく、全二十四巻一括購入制で分売はしないという。

岩波書店が独自の文化的指導性を誇る一方で、出版業者としてこれまた独特のしたたかな商魂の持主であるのは知る人ぞ知るところだ。しかし今回は諦めなかった。敵がその気なら当方にも応戦の方法が無い訳ではない。ただし時間と労力、そして何よりもそれを支える情熱が必要であるが、何しろ詩集第一巻を最初に配本して置き、最後の第五巻は刊行も終りに近い二十二回目に持ってくるという「敵」との対決なのだから。

具体的手段は私の企業秘密だが、とにかく二年半の歳月の後、五冊の詩集だけが今や私の本棚に燦然と並んでいる。装幀もいささか岩波らしさが過ぎるけれど決して悪くない。

しかし、その昔のアルス版全集に見られたいかにも大正モダニズムの匂いを漂わせる雰囲気には遠いものがある。現代は文化も商魂もかつての大らかさを失ってしまったのかと、したたか商法を掻い潜った勝利の甘さと共に一抹の淋しさが残る結末だった。

(南北)

〝ミュージカル龍馬〟入選脚本決定

一　席（一編・賞状と賞金二十万円）

該当作なし

佳　作（三編・各賞状と賞金五万円）

「ミュージカル龍馬」　高橋博子　東京都

「勤王党始末」　高木信介　大阪府

「希望は未来のなかに」　浜田真理子　高知市

奨励賞（二編・各賞状と記念品）

「ミュージカル龍馬物語」　森岡豊秋　大川村

「南国土佐をあとにして」　濱田幸吉　高知市

公募中の「ミュージカル龍馬」の脚本選考会は、八人の選考委員が出席して六月二十二日(月)、当事業団会議室で行われ、右の方々の作品に決定いたしました。

応募総数十五編のうち、県内四編に対し、東京、大阪をはじめ神戸、和歌山などから十一編が寄せられました。

今後はこれらの佳作を下敷きとして加筆し、最終脚本を仕上げ、今年度中をめどに曲作り、振り付け、出演者の募集などの作業を行う予定です。またミュージカルの完成披露は市制百周年の六十四年四月を予定しています。

〈文化事業団の共催事業〉

こどもの本を語る　第二回高知大会

七月二十六日(日)
潮江市民図書館
協力券　五百円

▼昨年にひきつづく第二回大会。分科会（午前九時三十分～午後二時）のあと、赤木かん子氏、原田奈翁雄氏の記念講演の予定。

大島渚監督の講演と映画『少年』上映会

八月二十二日(土)午後六時三十分
県民ホール（グリーン）
前売り　一五〇〇円（大人）
当日　一八〇〇円（大人）

▼講演テーマは「映画を通して見た世界」。映画『少年』は高知県を舞台にした作品で、一九六九年度キネマ旬報脚本賞ほかを受賞。終映は午後九時十五分の予定。

●郷土文化会館で開催された「中山高陽展」は前期・後期を通じて七十三点の作品と、紛本や関係資料を展示いたしました。多数の方々にご来場いただきましたが、五月十七日好評のうちに無事終了いたしました。有難うございました。

●講演会「蘇れ、地方都市―市制一〇〇周年をふまえて―」（講師・㈱電通都市開発センター企画部長・西村靖氏）を、五月二十五日（月）高新放送会館で開催。各地の事例を紹介しながら、今後の事業展開をどのように行うかについて講演。

●文化都市づくりセミナー「地域文化における公共建築の役割」（講師・金子正則・元香川県知事）を、六月二十六日（金）高知共済会館で開催。「デザイン知事」と呼ばれた金子氏の話を聞き、これからの公共建築のあり方を探る。

●「朗読を楽しむ―公開朗読講座―」（講師・厳金四郎氏）を、六月二十八日（日）、高知共済会館で開催。専門家による指導と模範朗読を行う。

事業団の出版物

中山高陽　清水孝之著　定価三八〇〇円

高知県が生んだ文人画家、中山高陽を三十年来にわたって研究した著者の労作。巻末に書簡集、資料集、年譜を付す。

土佐の芸能　高木啓夫著　定価四八〇〇円

芸能の宝庫といわれる高知県に伝わるさまざまな民俗芸能を詳細に解説。民俗を考えるうえでの貴重な一書。

高知県方言辞典　土居重俊・浜田数義著　定価六〇〇〇円

明日を創る　大谷英二著　定価一〇〇〇円

おらんくことばてんこもり　定価八〇〇円

財団法人　高知市文化振興事業団
〒780　高知市本町五丁目二番三号
TEL（〇八八八）㉓四三六五
郵便振替　徳島8-14869